

■ 市長から市民のみなさんへ

山陽小野田市長
白井 修 文



■ 新火葬場の基本方針が決まりました

本市に二つある火葬場（小野田と山陽）は、いずれも建設後 33 年が経ち、老朽化が進み、故障などのトラブルへの不安を常に抱えながら業務を行っています。

他の公共施設同様、合併特例債を活用した新火葬場の建設を計画しましたが、折しも宇部市の火葬場も寿命が尽きかけており、建設費用などを考えると、財政的には「広域による共同事業」も魅力がないわけではありません。約 1 年かけ、両市の事務レベルで調査研究を行い、広域連携による火葬場建設の方が、確かに財政的メリットはあることが確認されましたが、本市における、その後の市内 12 会場で開いた市政説明会での市民の発言、2,000 人を対象とした市民アンケートの結果、さらには「新火葬場建設基本方針検討委員会」の提言書によると、市民の大多数は、新火葬場を市内、それも山陽斎場がある場所に規模を拡大し、本市単独で建て替えることを望んでいることが明確になりました。その結果を踏まえ、担当職員が山陽斎場周辺のみなさんの自宅や事業所を回り、これまでの経緯等を含めご説明したところ、多くの市民や事業主からご理解をいただいたそうです。

これらのことから総合的に判断し、本市は新火葬場については、本市単独で山陽斎場の建て替え方式とすることとしました。

■ 学校図書支援員もがんばっています

本市では、小中学校へ常勤の図書支援員（専任）の配置を平成 22 年度から始め、平成 24 年度には全校への配置を終えました。小中学校の教員は県費負担ですが、図書支援員の配置は市の事業です。県下では、先進的な取り組みとして高い評価を受けています。

教育委員会の報告によると、小学校では「図書の時間」を活用するなど、小中学校ともに学校図書館を利用した授業が増えているとか。図書支援員も本の貸出だけでなく、授業で使う本を選んだり、他の図書館と本の貸し借りをしたり、子どもたちが学校図書館を利用しやすくなるような環境整備など、あれこれ努力してくれています。子どもたちも「知りたい」「読みたい」という知的好奇心から学校図書館の利用が増え、図書の貸出冊数も大幅に増加するなど、多くの成果を上げているそうです。

この実績を踏まえ、夏休みについても一定期間、学校図書館を子どもに開放するとか、図書支援員が市立図書館に出向き、子どもたちの図書利用を支援すること、なども検討しているそうです。

本に接する機会をできるだけ増やし、子どもたちの「生きる力」を一段と伸ばしてやれたらと願っています。